

2013 年度ドクター研究員研究活動実績報告書

ふり 氏 がな 名	つじ 辻 たかひろ 高広
(研究テーマ名) 江西省における裁釐統捐の実施と地域社会、中央との関係について	
(研究活動実績) <p>本研究では、清末江西省における釐金徴収について、その存廃をめぐる議論の展開を、江西省を取り巻く経済的状況と関連づけて分析した。江西省の釐金徴収システムは、網の目のように張り巡らされた釐卡と、卡員による苛烈な徴収によって維持されてきた。清朝中央はこのようなシステムが商民の負担となっていることを把握しつつも、財政的必要性からこれを黙認した。一方、江西地方政府も釐金が商品流通に及ぼす害を理解しつつも、釐卡の革除が省外への密移出や米穀の採買を通じた無制限な流出につながっていることを特に危険視していた。このような中央の妥協と地方の危機意識によって、光緒末に行われた釐金改革でも釐卡の裁減に関しては概ね消極的であった。余剩釐卡は一部革除されたものの、流通管理上、重要な釐卡に関しては廃止が議論されるものの実現には至らず、廃止された釐卡が再設されることすらあり、結果として釐卡数は維持され続けた。以上の分析を通じて、江西釐金が単なる財政収入の手段ではなく、事実上の流通管理システムとして地方官に認識され、運用されていたこと、その背景には食糧生産基地であり、流通の結節点に位置するという江西の地理的・経済的状況が大きく影響していたことを指摘した。以上の研究内容を「清末の江西省における裁釐論と釐卡の裁廃」の題目で『東洋学報』に投稿、第 95 巻第 2 号に採録された。</p> <p>また、上記研究の背景となる江西省の流通と都市の発展についても分析を進め、中国国家図書館古籍館にて史料調査（2013 年 8 月 27 日～9 月 4 日）、「清末、江西省の商品流通と釐金徴収」という題目で中国都市史セミナー「中国周縁の都市を考える」（2013 年 9 月 7 日、大阪市立大学）にて報告、その際に得られた知見を加えて「清末江西省経済と地域間関係」として論文とした。当該論文は塚田孝、佐賀朝、八木滋編『近世身分社会の比較史—法と社会の視点から—』（清文堂出版、2014 年 3 月刊行予定）に収録予定である。</p>	